

中年の鮒の大漁

# 中浦湾での漁の歴史をたどる

贊助會員  
安部弘右衛門

① 繩を輪綱でとふうとーて

中浦湾は地図で見ると、佐伯湾の南部に位置し、鶴見半島の中程北側にあり、鶴見町大字中越浦宇土島と羽出浦白崎との間に包含されている入江である。  
この湾は岸辺から水深く、網代<sup>あいだ</sup>では海底に岩礁多く、潮流も至つて緩慢な好漁場であり、昔は魚群の来遊も多  
く、鮎<sup>アユ</sup>をはじめ、鮒<sup>ハタ</sup>・鮪<sup>マグロ</sup>などの漁場としてては、佐伯九十

丸浦中第一で移へた。

出典 三十九軒（人數三百三十人）の羽  
とは記録が古いかであからま  
いが、享保五年五月には家数  
六帖（うち片手一帖）

今まで経営者は変つても収入  
変らず、中越漁にもまだ同数  
に近い網があつたと云う。



づき、その運上銀は藩庫を豊かにして、殿様によろこばれていたそうである。勿論耕地の少ない村の經濟も、漸くのみで支えていたことであらう。

以上は井戸浦庄屋古文書によつて、凡て察知せしれど二とである。

明治維新前後から、中浦湾の漁況は明らかではないが、明治十年代には、毎年のように鰯・鮭・鰹など大漁事がつづいて、その中でも、古老たちが口をそろえて「中年（なかねん）の魚」という話をよくしていながら、事実とは思えぬ程の漁獲がありつて、当時は大人も子供も、眠るひまもない程の忙しきで、漁獲と製造にてんてこ舞（まわ）をしていたところである。

その頃の芳多冬、羽出浦の小食の網代で、羽出、中越有明三浦の鯿網が十二帖集まり、三層夜の間次ぎ次ぎに網を曳いて、中には、一帖の網で何千尾という鯿を大漁して、一躍大金商に至った網元もおつとひう。それほどの事を事実であり、後の晩では、座敷の床の間に、千箱を十一並べたと伝えられていた。

それほ、この日第一番の漁獲はまつた。精肉の食の網と呼んだ、吉岡友太郎氏の家であつた。しかしその漁の大漁が明治何年であつたか、それを知つている人は、まだ一人もいなかつた。

筆者か才志若く頃古考古學が社會の生業  
を語り合ひ、又艦總のあつた時分のことなど語り合ひ  
が、その話の中によく「轉年」「申歲」と言つていたの  
を聞へてゐる。

しかし明治十数年前後の一申年と云は、それはいつであつたろうか。明治五年が「壬午年」に当たり、その次乃明治十七年が「甲申年」であるが、そのどちらであるか

に困つていたところ、今までまた次のような文献が手には  
いへた。

### 南海部郡沿海漁業の地勢並々漁具一覧

(明治十五年発行)

(前略)

我郡東中浦地区は、時々数万尾の鯛がよせて来る  
が、元来この地方ではこれを鈎るばかりで、網で引く  
ことを知らない。此の大群を望みて空しく機知傍観す  
るのみであつたが、明治年中、坂本德松、今津育成の  
兩人「いるかぐい」で疲労困憊にして地方によつて來  
た(鯛)を、鰐網でおきまわして、必ずが五六尾だが  
とにかくアリ引き引いた。

それから何度かやつて見立が、才人(さしにん)、鯛が大引  
網では、引けるものではない。それで大引網をすつか  
り「草網」にかえ、総長六百尋、全部「真網」にした。  
それでだんだん鯛が引けるようになつた。けれども大  
群になると、魚の勢いがあらべからずして、何回か網  
をチンギンに破られて、これが復旧に資産を蕩尽し、  
辛酸をなめつづけながら網をつづけていたが、明治  
十二年大漁があつた。これで借金を返してしまつた。

この経験から、その翌十三年に、今津は網糸に充分  
革のよいのを選び、「一二三」を「二三」に改めたので、  
それからはほとんど網をつき破られることはなくなつ  
たが、こんどは万という魚になると、真取りを吹き上  
げて、その下から逃げるので、「丸子」が軽いと、さと  
り、今まで五十かけ左「丸子石」を七十石(せき)  
にした。

それで今度は容易に袋を持ち上げようとなつたが、  
今度は「丸子」を押し沈めて、其の上から逃げて行く。  
それで従来使つてい左桐の「漁子」長さ八寸、巾六寸、

(二) 小倉網代での鯛の状況

聞くところによると、網を引上げた場所は、敷場の網代である  
が、はじめ鯛の群れをおき廻したのは、敷場の網代であ  
つたというのが実説のようである。(次ページ参照)

始め敷場網代で鯛の大群をおき廻したと云ふ、それが  
超大群であつたので、急捕りの穀や、それに連続してい  
る網を魚群が突上げて、逆網の方にせり寄せてしまつた  
ので、はじめ敷場網代に投げ入れた網の主体は、ほとん  
ど小倉網代にせり寄せてしまつてゐるので、このままこ  
の網を、地方に引き寄せようと逆網の「中鼻」礁せ  
で、網を破るだけではなく、網も寄つて来ないことが明らか  
であるので、各網船を順次沖合に繰り出し、前から船  
は魚の追い込みに懸命になり、網船は無事小倉網代に位  
置を移して、網を小倉網代に引き寄せる作業に成功した。

何分鯛が大群であるので、羽出、中越西浦の鯛網全部  
と、有明海三帖の網船が全部、小倉網代の周辺に集まり、  
一番網の後を二番網が、その後を三番網が、その次日四  
番というように、先着網の中の魚の状況を観察して皮、  
次ぎつぎに網を入れるので、その操業には相当の時間さ  
要し、全部の網が漁撈作業を終つたのは、三日目であつ  
たことであった。

厚さ三寸のものを、巾七寸五分に改め、尚その数を増  
しつつ、網の構造も大丈夫になり、一時に一万両余  
の鯛を漁し得ることとなり、漸々他浦も亦改良におも  
むき、大いに漁利をあこした。(後略)

漁獲高について、二番網の大黒網が一番多く、何万尾の大漁で、床の間に千両箱を十一個積み並べたという伝説さえ生まれた。明治十七年とすれば、すでに通貨は西でなく円であつたので文字通りの千両箱でもあるまいが、今の船の相場で言うなら、概算数千万円づつの水揚げを見たわけだ、まさに空前絶後の大漁であつた。そしてハツマでもハツマでも郷土の語り草になつてゐた。

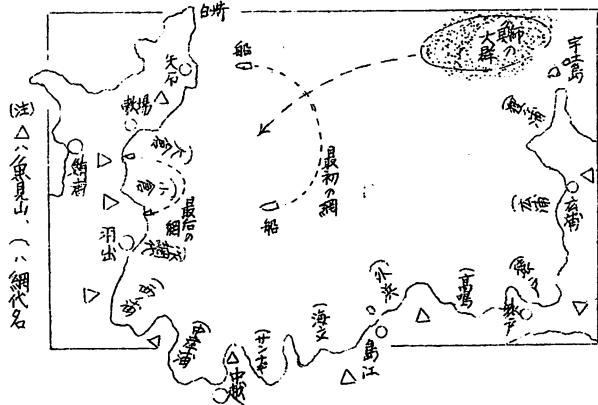
このことについての掉話を二三つぎに紹介しよう。

〔第一話〕

「第一話」

その頃、羽出浦の人で、今津音蔵氏の神力網の引子であつた高橋米吉さん（故人）の長男、高橋治平翁（九十一オ）は語られる。

「お父さんが生前よく語っていました。その日神力網は広浦番に当つていた。網船は広浦の網代沖の定位置に錨を下して仮泊し、網親方やムラギンさん（魚見担当の漁師）さん達は、山の上の太松の根方で、例によく魚見をしていると、宇土島の方はるか沖合へ広い範囲にわたつて海の色が変り、それが次第に西寄りに移動していくのが認められた。これが郷の大群であると直感したムラギン衆は、息をとめて魚群の移動を見てみると、この魚群は広浦・猿戸方面の網代には寄らず、一路敷場網代方面に向かう公算が強いと見て、なお魚群の進路に注意



「一方、高鳴<sup>タカヒコ</sup>や猿戸<sup>さると</sup>網代の魚見に登つていいた他の網のムラギン衆も、広浦の魚見の人々と同様に、魚群の移動方向に注意を怠らず注視していくが、いよいよこの魚日広浦、猿戸には寄らず敷場網代方向へ直進するであろうと見込みをつけたところ、羽尖浦方面の魚見山が発見はじめ、各網代にあつた網船が、敷場の網代に總移動を始めたので、広浦、猿戸、高鳴網代の各網船も、おくれてならじと全部敷場向きに移動に移つた。

既に魚群は敷場網代に達し、待ち受けていた網はすでにこの魚群をむき廻し、二番手、三番手の網船もつぎつぎに到着して操業をはじめ、羽出、中越の網全部の外、有明浦からも三帖の網船が来て、つゞつぎに後から網を入札たので、結局十二帖全部が操業し、最終力網が引上げたのは第三日目であつた。

漁獲は一番網よりも二番網の方がはるかに多く、それが大黒網であつた。」

「第二話」  
当時羽出浦の吉岡友太郎氏の經營する大黒網の引子であつた安部庄吉（故人）の孫、安部庄一さん（七十五才）は、八のようすに語る。  
「子供の頃に、祖父が次のように話していくのを聞い

倉の網が小倉で鮒の大魚  
年若で、おもて廻りをし

獅の大群だと、うので、全員一生懸命にさり、大船を製場の網代に向けて力漕きはじめ、途中で東の若狭湾網と、網船を並べて競争になつた。

敷場網代に着くと、船を並べていた二帖の網戸、互に先着き主張して烈し、論争になり、船もありの若

「連中は、早くも水草などをして振り廻しあじめた。大事の場合は轟んで、思慮あるムラギンや老漁夫たちは、轟き若者と制止して談合をはじめ、轟引キヤクにて定めることにし、抽籤の結果二番網は若戎網、三番網は大黒網、

若戎網は三番網であつたが思ひの外の大漁をしたので、みんな元気一杯で現場から引揚げ、定置場に帰つて来あが、大黒網の若い連中に暴力で、樽の鏡板子打がち抜かれた。何とても心外である。

『よしッ、あの樽を打破つたのは大地下の庄吉だ。』

庄吉の所へ持つて行つて、元通りに修復させてやれ。』

と、若戎網でも血の氣の多い「夕力派」の連中が騒が立て、交渉の役に選ばれたのは庄吉祖父さんと同年輩で、しかも網親方の近親に当る、農場の坂本徳治郎といふ若者で立つた。

大衆の意志に背き得ぬ徳治郎青年は、早速庄吉青年を訪ね、懇ろに来意を告げ交渉の結果、樽は以前の完全な姿になつたが、面白いことにこの二人の青年はこれが機縁となつて、生涯親密な友好関係を保つようになつた。

といふことである。そのことの不思議さに、庄吉老人も感慨をこめて、可愛いい孫の庄一さんに語つたものであろう。

また伝説では、この時に漁れた鯛一尾の代価はたつた七文であつたそうで、如何に豊漁であり、如何に金銭の価値が貴い時代であつたかがわかるが、それにして三貫又へ約12時以内外の鯛一尾が、七文位で売買されると信じられないほどの、そんな時代であつた。まつとも其の後十年左へた明治二十七年、出来網が高鳴網代で鯛を

三百匹ほど引いて羽出に持ち帰つたことがあって、私たちは友達三人がその一尾を貰つたことがある。それを売つて金に代えたが、七十文前後が八十文近くはずれがであつたので、考えられぬことはない。

何といつても昔の漁の話は、夢のようである。

（つづく）

#### 資料紹介

##### 鉄道開通式祝賀の歌

細野浦 小野とよやん（よ）による（紹介 審査 案）

去る二月五日、上八津川橋百周年記念のため、記念誌編さん委員会が開催された。それは大正時代の教育と諸の座談会で、現萬葉教育長岡本藤一郎氏が入津校教頭だった時代の教え兒八百種を集め「旧師と教え兒の会」が開催されていた。

その席上、当時の生徒小野とよやん（よ）が入津校の先生であった高司アサ先生（高崎村植松、足利神教宮司高司家の一人、のち清原重太郎先生と結婚なさる）に「おられたて、大正五年十一月 日の佐伯駅の鉄道開通式見物に出かけた。

初めての所、しかも汽車が走とは聞いて走る開通祝賀の振舞い、細野浦が一步もよそに出てこないが、田舎の少々とつては、驚きだらけがござる。歌の構成を理めていた人々と共に、小旗を振つて汽車を迎えたことだろ。

その日の祝賀の行列は歌われた鉄道開通式祝賀唱歌を、トヨとよさんは全部おぼえていて、美一（声）で歌つてくれたのである。

ふし（歌詞）は「梁笛一聲新橋を」の鉄道唱歌である。全文を紹介しよう。

- (一) 鉄道の來えの「ちじるく  
あふるる露の方々がぐみに  
九十九湖もうるおいで  
通ひ及じめし汽車の道
- (二) 十歳のあまい待ちわびし  
いでや歌わんもろ共へ  
裏丸の豊かくに  
脚踏のたより整ひて

鐵路の長さ、百里  
にぎわつ今日のうれしさを

- (四) 大正五年萬月の  
よろこびみて鶴城下  
秋の日高く氣ますみて  
幸いながら審正川  
（おわり）